

今から15年くらい前だったか、実家の父が病床に伏したので、わたしは、山中湖と東京を週単位で往復する生活に切り替えた。男兄弟がなく、自分が実質的な長子ということもあり、断腸の思いで山中湖の無店舗パン屋をたたんだ。おりしも、自分の家庭内でもさまざまな問題がおこり、毎日が憂鬱で重かった。

そんなある日、目黒区の新聞販売店のサービスで、歌舞伎座の三等席チケットが手に入ったので、気晴らし半分で出かけた。たしか、演目は吉右衛門の〈俊寛〉だった。

ものすごい衝撃だった。それまで歌舞伎を観る機会は何度かあったが、その日の歌舞伎は、今までの認識とはまったく異なる世界に自分を招いたと思う。

その日から、わたしはとりつかれたように歌舞伎座の最上階、幕見席に通うようになった。そこは、一幕単位で舞台を観ることができ、当時は、開幕時間前に並んでいれば、たとえば700円で〈藤娘〉や〈保名〉が観られた。

舞台上で演じられるのは、主に〈女たらし〉〈盗賊〉〈ばくち打ち〉〈懲りない詐欺師〉〈恋におぼれる遊女〉〈友情も人情もふみにじる悪人〉〈大酒のみ〉の内容がほとんど。正義が勝つ物語より、どうしようもない庶民の業が舞台の花になる。どうしてそんな愚かな人物たちを、女性たちはおしゃれをして観に来るのか、そのアンバランスについて笑ってしまうのだが、自分は毎回、ただ歌舞伎の舞台にすくわれたくて、必死で通った。

歌舞伎の舞台を観ていると、人間の善悪の捉え方が鷹揚で、頭が楽になる。真面目と不真面目、成功と失敗、いい人とだめな人、正直者とうそつき、努力と怠慢、普通と普通ではないこと、これらの定義と区別が曖昧で、それは自分にとって、大きなすくいだった。